

2022年12月発行

CWS JAPAN NEWSLETTER NO. 75

いつもCWS Japanの活動に温かいご支援、
ご理解をいただき、ありがとうございます

CWS米国本部職員の初 来日を終えて

先月11月はCWS米国本部から、プログラム担当副社長のエロール・ケキック氏が初来日してくれました。福島や石巻と一緒に行って東日本大震災の教訓を学んでいただいたり、今後に向けた戦略会議をしたりと超多忙な一週間になりました。すべての予定を終えて、日本のこと、そしてCWS Japanのことについてインタビューを試みましたので、皆さんにも共有させてください。

Q1. 今回の来日で印象に残ったことを教えてください。

現地視察とCWS Japanのスタッフとの会議を両方行いました。まず、CWSでのわたしの役割として、CWSが活動している/活動してきた現場を直に知る必要があると感じていたので、福島・宮城を訪れたことで、CWS Japanの活動のアプローチ、関わり方の時間軸、そして迫力を大いに感じることができました。CWS Japanの情熱、プロフェッショナリズム、コミュニティ志向は並外れたものであり、感銘を受けました。

CWS Japanのスタッフとお会いできたことは、スタッフの仕事、アプローチ、チーム体制についてより深く理解することができ、大変刺激的な機会でした。CWS Globalの重要な一部であるCWS Japanは、良い方向性で進んでおり、さらに明るい未来に向かって進んでいるのだと確信しました。

OUR BLOG IS OPEN!

今月からニュースレターを
NOTEでも配信しています。

いつも多くの方にご覧頂いている
ニュースレターをもっと手軽に、
どこでも読みやすくしていきたい
と思っています。



写真

石巻の大川小学校にて語り部さんから
話を伺いました（左：語り部、右：小美野、エロール氏）

Q2. 初めて日本に来ましたが、どのような印象を持たれましたか？

わたしは日本、その文化（ほんの少ししか吸収できませんでしたが）、人々、そして伝統を大いに楽しみました。そして食べ物もです。必ず日本にまた来て、もっとたくさん探検するつもりです。ひとつ特筆することがあるとすれば、日本社会に深く根付いている「（災害への）備え」という概念について、より深く理解できるようになったことです。災害に対する備えと対応について、長く誇らしい伝統を持つ国として、日本はこの分野で世界をリードしていることは間違いありません。

Q3. CWS Globalの方向性を踏まえ、CWS Japanの役割をどのように位置づけ、認識していますか？そして、近い将来、CWS Japanにどのようなことを期待しますか？

CWS Globalで多くの新しいエキサイティングな展開がある中、CWS Japanとも相互にいい影響を及ぼし合っていることを大変嬉しく思っています。CWS Japanは、CWS Globalの一部であり、現地の法律や規制に従って日本で団体登録されています。今後数カ月、数年のうちに、より緊密な連携と共同企画を行うことを大いに期待しています。

CWS Japanには素晴らしいスタッフが揃っていると思いますし、そのチームがさらに拡大し、発展していくことを期待しています。彼らはポテンシャルがあり、考え方も現実的で勇敢で、前向きです。CWS Japanのピークはまだこれからくるのだと思います。

CWS Japanの理事にもお会いしましたが、CWS Japanのガバナンス体制は、チームの仕事と方向性をサポートするために揺るぎないものであり、堅実なものでした。財政的にも、技術的にも、そして精神的にもCWS Japanを支えてくださっています。わたしは、CWS Japanの3人の理事にお会いする機会を得たことを大変嬉しく思っており、彼らの時間と視点に感謝しています。CWS Japanの理事会は、新しい方向性にCWS Japanが適応しながら成長することを導いていくでしょう。



写真
石巻の北上川下流地点にて

インタビューを終えて

以上がエロール氏からいただいたメッセージですが、わたしが感銘を受けたことも記しておきたいと思います。

実は彼自身がコソボ紛争の時米国に逃れた難民であり、ご自身の経験から「なぜ我々はこの活動をするのか」が非常に明確になっている方だと感じました。銃撃を受けながら紛争地から避難した時の話や、米国でバスターミナルのチケット売りから仕事を始めたことなど、彼の知らない部分をたくさん垣間見ることができました。たくさん失ってきた彼だからこそ、辛い境遇に置かれている人々に共感できるのだと感じましたし、だからこそ「効果的な支援は何だろう」とぶれずに考えていけるのだと思います。

CWSのグローバルリーダーは、こんな人でした。

（文：事務局長 小美野 剛）

ドイツから日本に一 時帰国して思うこと

12月に入り実家がある東京もだいぶ寒くなりましたが、ドイツよりも晴れ間が多く暖かくて過ごしやすいですね。黄金色の銀杏並木やドイツでは珍しい深紅に色づいた紅葉に見惚れることしばしば。

いつもはオンライン上でしか顔を合わせられない同僚やインターンの学生さんと対面でやりとりができ、身も心も何だか引き締まった感じがしています。



写真
実家近くを散歩していたとき
(東京近郊)

印象に残ったできごと

今回の滞在で印象に残っているのは、米国で人道支援に長らく携わりCWSとも関わりがあるDouglas Smith氏とVy Nguyen氏の来日に居合わせることができ、東日本大震災の震災遺構である宮城県の石巻市立大川小学校と仙台市立荒浜小学校へ同行訪問できたことです。



写真
東日本大震災 震災遺構
石巻市立大川小学校

校舎や校庭は大津波に襲われたときのまま残されており、当時の状況がひしひしと伝わってきます。いろいろなかたちで大きな爪痕が残されている光景を目の当たりにして心が痛むとともに、平時での防災への取り組みの大切さもさることながら、自然の威力を前にいかに人が無力であるかということを強く感じました。



写真
東日本大震災 震災遺構
仙台市立荒浜小学校

思うこと

家族と離れて単身での日本滞在。日ごろの雑事から解放され、外国人として不便もしょっちゅう感じるドイツでの生活からも開放され、束の間の自由を堪能しましたが、そろそろドイツに戻る日が近づいています。

日本を離れて早や10年。どちらの国も自分の居場所がない根なし草のような感じを持ち始めていますが、違う角度からいろいろと考え学ぶことができるものなんだという思いの芽を、ドイツに戻ってから大切に育てていければいいです。



写真
ドイツでの
クリスマス・イルミネーションの様子
(Schloss Benrath ベンラート城)

(文：プロジェクト・オフィサーライン 静香)

クリスマスに思い・想う

この記事をご覧になっている皆さんはこのクリスマスをごどのような想いで迎えているでしょうか？

わたしにとってのアドベント

世界中のクリスチャンにとって、キリストの降誕であるクリスマスを待ち望むアドベント(Advent)は特別な期間です。わたしは、これまで、様々な土地でアドベントを迎えてきましたが、どこにいても、南半球の暑い冬でさえ、この時期が一年で最も好きです。普段は仕事と生活に追われるばかりですが、12月に入ると、クリスマスカードが届き始め、遠く離れた友人達のことを想い、少しずつ心も落ち着き、静寂さに包まれていくような時を迎えます。

日本にいと、そんな心境とは逆に、「師走」という仏教的な意味があり、一年で最も

慌ただしく、また街なかでは華やかさが増し、クリスマスソングかかりっぱなし商戦シーズン到来という様相になりますが、わたしにとっては内省の時期です。



写真
CWSオフィス施設内に立つ
クリスマスツリー

出会いへの感謝

この一年をふり返って思うことは「出会いへの感謝」です。

未だ続くコロナ禍でも様々な出会いがあり、その出会いに導かれるように、そこからまた新たな出会いがありました。そのなかには喜ばしい出会いだけではなく、それまで出会うことがなかった深刻な問題を抱える人々との出会いがあり、なかなか解決に導けないわたしを悩ませるものでした。

一方で、その課題に取り組むなかで、わたし自身が他団体・個人に助けを求めたことによって、志を共有する仲間を得ることができました。

"本当に取り残されている
人たちは見えにくく、
見えないというよりも、
見ようとしてこなかった
ことを知りました。"

新型コロナウイルス感染症のパンデミック以来、この2年間というものの、全くパスポートを使うことなく国内に身を置いて、この日本社会で見えなくされている人々のことを知り、繋がりたいと様々な土地や支援現場に赴き、活動に参加してきました。

取り残される人々

SDGs (Sustainable Development Goals の略。持続可能な開発目標) は一般企業も社会貢献の謳い文句として使い始めたことにより、あのロゴもあらゆる場面で見かけますし、確かに広く世間に浸透させることができたでしょう。なかでも「誰一人取り残さない」というキャッチを重要テーマに掲げていることは大変喜ばしいことですが、言うは易く行うは難し・・・。

本当に取り残されている人たちは見えにくく、見えないというよりも、見ようとしてこなかったことを知りました。

在留資格がなく行政サービスにアクセスできないが就労も許されない外国人、入管に長期収容され精神を病んでしまった外国人、職場で理不尽な差別・暴力を受けた技能実習生、持病がありながらも家族を支え働き続ける外国人高齢者、在留資格がなく公立校に受け入れてもらえない小学生、冷たい地下道で座り込む若い路上生活者、精神障害を持ち地域から孤立する被災者などなど・・・

全て、今の日本社会で暮らす人々であり、探さなければ出会えない人々です。



写真
2月に主催した外国人相談会の来場者
©CWS Japan

かすかな希望

ちょっと12月のうすら寒い曇り空のようなことを書きましたが、少し気持ちが上向きそうな新聞記事を目にしました。

オランダの大手人材サービス会社が主要国・地域を対象に行った調査結果によると、「世界に貢献する仕事なら収入が減ってもいい。」「多様性や公正性を重視しない組織では働かない。」という回答が若年層で4割を超したそうです。

それは、お金以外の価値基準を重んじ、社会的意義を追い求める個人が台頭してきたことを意味しており、この結果にわたしは少しだけ希望の光を見たような気がします。



イメージ図

さて、これをご覧になっている皆さまはこのクリスマス、何を思い、誰を想うでしょうか？

(文：ディレクター：牧 由希子)

過去のニュースレターやインタビュー記事は
下記よりアクセス頂けます。

過去のニュースレターは[こちら](#)

インタビュー記事は[こちら](#)



いつもご購入いただき、ありがとうございます。
2022年も大変お世話になりました。どうぞ平和なクリスマスをお迎え下さい。
次回のニュースレターは来年1月末の発行を予定しています。

特定非営利活動法人CWSJapan
〒169-0051
東京都新宿区西早稲田2-3-18
日本キリスト教会館25号室

メールアドレス：
public@cwsjapan.jp
電話：
03-6457-6840



[CWSJapan](#)



[@Japan_CWS](#)



[cws_japan](#)